

われ怯懦きようだならざりしか

若い野球監督が、準優勝に腹をたて賞状を部員の前で破り捨てて話題になった。私にも思い当たることがある。しかし、私は彼とちがってすでに年をくついていた。知事交代で、格下げのような辞令を渡されたとき、破りきれず、自席に戻ってくず籠かごに放りこむことで独り憂うれさを晴らした。苦しいことは忘れない。二十年前のこと。

それでも職を止めなかったから、やっぱり事は露あわになる。それから半年、知事査定。新規重要事業を説明して、その適否を知事が査定するという大事な場面である。ある重点事業を今回こそどうしても通そうと担当部長は、次長の私にも応援を求めた。だから、部長説明に続いて私も補足を始めた。「この事業をしていない県は全国でも滋賀県と大分の二県です」と言いも終わらぬうちに、「そんなこと、君に言われんでも分かつとるっ」。知事の怒声が狭くもない部屋に響きわたった。

並み居る幹部連はあつと息をのんだ。私は一瞬われを失うが、屈辱は顔を蒼白そうはくにさせ、心はすでに開き直りを始めていた。

―黙すべきか、抗すべきか。ここは厳たる公務の席。怒鳴るとは何なのか。皆が見ている知っている、だから耐えよ。大人げないことをするな。いや、そんなリクツは卑怯者のいうこと。ひきょうものお前は知事の権力がそんなに怖いのか、私事ではないんだぞ。―心の中で二人の私はきりなく争い続ける。

議事が終わるまでの三十分間、私はもうそっぽを向いたまま、不服従を示すだけで、何事もなかったように終わった。迷い尽くしたまま。

鮮烈に思い出す今も、わが選択の道の正しさを知らず、胸はまだ立ち騒ぐ。一寸の虫に五分の魂はあったのか、なかったのか。ああ、貧しい生涯の中の最たる悔い。ここで真実問われているのは、「なんじ汝、最も怯懦ならざりしか」の一点に凝集されているからである。

(一九八七年十二月三日)